【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1111

大項目	Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－1　適時適切な収集

【年度計画】
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。
(東京国立博物館)
日本を中心として広くアジア諸地域の文化の体系的陳列を目指し、絵画、書跡、彫刻、工芸、考古、歴史資料の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
・購入件数 16件 内訳：絵画 5件、書跡 1件、漆工 1件、東洋金工 1件、東洋染織 8件
・決算額 225,880,400円

27年度は、絵画5件「住吉物語絵巻断簡」「玄圃瑤華」「四季遊楽図画稿」「倣董源山水図」「桃源仙境図屏風」、書跡1件「和漢朗詠集巻下断簡(戊辰切)」、漆工1件「吉野宮蒔絵書棚」、東洋金工1件「七宝簪・粧刀・眼鏡入」、東洋染織8件「刺繍花鳥図屏風」「ウォンサム（円衫）花唐草文様紋紗」「テンギ　紅地襷福字梅花文様浮紋織印金」「チョガッポ　古銭文様縫い合わせ」「チョガッポ　三角形繋ぎ文様縫い合わせ」「チョガッポ　三角繋ぎ文様縫い合わせ」「チョガッポ　石畳文様縫い合わせ」「チョガッポ　石畳文様縫い合わせ」の計16件を購入した。

【補足事項】
・絵画は例年以上に質の高い作品を数多く購入できた。
・「住吉物語絵巻断簡」は、住吉物語絵巻の現存最古本の断簡であり、美術的、資料的価値は極めて高い。当館所蔵の2件(巻子本1巻と断簡1幅)と一連の作品であり、当館で当然収蔵すべき作品である。
・「玄圃瑤華」は近年、非常に評価が高まった伊藤若冲の作品。拓版画という特異な技法による版画で、版画とはいえ本作以外には世界に3件しか現存しない珍しい作品である。

［購入品］住吉物語絵巻断簡

・「吉野宮蒔絵書棚」は徳川綱吉の時代の様々な精緻な技法を凝らした美麗な作品である。常憲院時代物の特徴がよくあらわれている優品で、美術的な価値は極めて高い。
・27年度の東洋金工、東洋染織の購入作品は、当館収蔵品の欠落部分を埋める作例で、しかも市場に出ることが稀であり、入手困難な類の作品である。今回、とくに古美術商との連携をはかり、購入することが可能となった。

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
収蔵品件数	116,932件	－	－		113,897	114,362	115,653	116,268
うち国宝	87件	－	－		87	87	87	87
うち重要文化財	634件	－	－		631	631	633	634
購入件数	16件	－	－		0	5	5	9

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｓ	27年度は作品の質・量、決算額ともに近年稀に見る高い水準に到達している。

【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。
(東京国立博物館)日本を中心にして広くアジア諸地域にわたる美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	本中期計画期間の実績を通覧すると、時代・地域・分野においてさほど偏りなく、日本を中心に広くアジア諸地域の作品を収集することができている。

【書式A】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1112

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)-1　適時適切な収集

【年度計画】
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。
(京都国立博物館)
京都文化を中心とした絵画、彫刻、書跡、陶磁器、染織品、漆工芸品、金工品、考古資料、歴史資料の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長　宮川禎一

【実績・成果】
・購入件数　18件　内訳：絵画4件、書跡3件、金工5件、陶磁4件、漆工1件、染織1件
・決算額　　797,790,000円

27年度絵画4件、「花見遊楽図屏風　狩野養信筆」、「池大雅像　福原五岳筆」、「四季山水図屏風　久隅守景筆」、「四季花鳥図屏風　源琦筆」、書跡3件、国宝「漢書楊雄伝第五十七」、重要文化財「正親町天皇御宸翰消息　蘭奢待云々　九条稙通宛」、重要文化財「寸松庵色紙（ちはやふる)」、金工5件、重要文化財「太刀　銘備中国住人左兵衛尉直次作／建武二年十一月」、「刀　銘越後守藤原国儔」ほか3件、陶磁4件、「銹絵寒山拾得図角皿　尾形光琳・乾山合作」、「灰陶加彩辟邪形器座」ほか2件、漆工1件「桐竹鳳凰菊桐紋蒔絵広蓋」、染織1件「紅文綾地菱亀甲文様総鹿子絞繍小袖」の計18件を購入した。
なお、27年度は当初配分された運営費交付金のみならず、目的積立金や自己収入予算、当機構の文化財保存活用基金を活用することで、質・量ともに当初想定以上の購入をすすめることができた。

【補足事項】
・絵画の「池大雅像　福原五岳筆」は大雅に最も近しい弟子が描いた迫真的な肖像画として貴重な作品である。

・書跡の国宝「漢書楊雄伝第五十七」は、唐の訓詁学者として著名な顔師古（581～645年）が注をほどこした『漢書』楊雄伝の写本である。また、顔師古とほぼ同時代の唯一の唐抄本として非常に高い価値を持つ。

・書跡の重要文化財「寸松庵色紙（ちはやふる)」は、歌が非常に有名で名品として代表的な古筆である。また、保存状態が良い点から、とりわけ高い展示効果が期待される。

・金工の重要文化財「太刀　銘備中国住人左兵衛尉直次作／建武二年十一月」は、鎌倉時代最末期・建武二年の年紀があり、基準作として極めて重要である。

・陶磁の「銹絵寒山拾得図角皿　尾形光琳・乾山合作」は乾山と光琳による画家と陶工の合作で、陶磁史としても貴重な作品である。なお、27年度当館にて開催された特別展覧会　琳派誕生400年記念「琳派　京を彩る」にて展示することもできた。

［購入品］　国宝「漢書楊雄伝第五十七」

［購入品］　「銹絵寒山拾得図角皿
尾形光琳・乾山合作」

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
収蔵品件数	7,532件	－	－		6,621	6,708	6,721	7,109
うち国宝	28件	－	－		27	27	27	27
うち重要文化財	183件	－	－		177	179	179	180
購入件数	18件	－	－		13	1	0	9

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	国宝1件、重要文化財3件を含め、当館の展示・研究の充実に寄与する作品の購入を当初の想定以上に進めることができた。

【中期計画記載事項】体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。
(京都国立博物館)京都文化を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	25年度は平成知新館準備のために購入実績はなかったが、27年度は当初の想定以上の購入を進めることができ、中期計画期間全体としては、京都文化を中心とした作品の購入を順調に達成することができた。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1113

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－1　適時適切な収集

【年度計画】
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。
(奈良国立博物館)
仏教美術及び奈良を中心とした絵画、彫刻、書跡、工芸品、考古資料、歴史資料等の中から重点的に購入する

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤　栄

【実績・成果】
・購入件数　4件　内訳：絵画3件、工芸1件
・決算額　140,400,000円

・絹本著色春日社寺曼荼羅　1幅
・紙本墨画帝釈天図像　1幅
・木製転法輪筒　1合
・紙本著色十巻抄（経法）　1巻

【補足事項】
購入品のうち木製転法輪筒は、筒形の容器に16体の尊像を表し、蓋表及び底裏に輪宝を彫刻して十字の梵字を墨書したもので、その特異な形式や墨書された尊名などから、転法輪法に用いられる転法輪筒と思われるもの。転法輪法とは、怨敵退散や国家安穏、あるいは安産を祈るために行われる密教の修法。本品は遺例の極めて少ない転法輪法の貴重な実作例であり、製作が平安～鎌倉時代（12世紀）に遡る点で高い価値を有する。また。稀少な遺例であることから、この機会を逃せば同種のものをコレクションに加えることが困難となる可能性が高い。
その外の3点も含め、仏教美術に重点を置く当館にとって展示に必要不可欠な品を購入できた。

木製転法輪筒

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
収蔵品件数	1,883件	－	－		1,831	1,834	1,862	1,877
うち国宝	13件	－	－		13	13	13	13
うち重要文化財	112件	－	－		109	111	111	111
購入件数	4件	－	－		4	2	3	15

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	仏教美術に重点をおいた適時適切な収集を実施できた。27年度は年度計画に掲げていたうち絵画と工芸品での購入にとどまったが、28年度以降は多分野での収集に取り組む。

【中期計画記載事項】
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。
(奈良国立博物館)
仏教美術及び奈良を中心とした美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	仏教美術を中心として文化財を収集することができた。過去4年間の実績と合わせ、体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積が出来ている。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1114

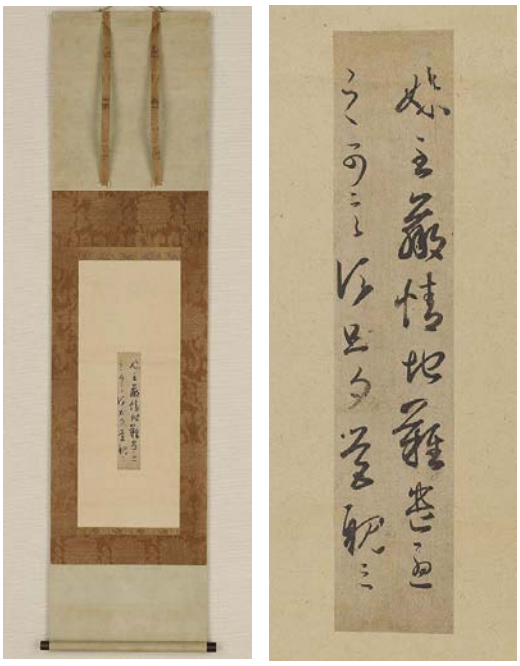
中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－1　適時適切な収集

【年度計画】
各館の収集方針に沿って、鑑査会議等で収集案を作成し、外部有識者からなる買取協議会の意見を踏まえて収集する。また、文化財の散逸や海外流出を防ぐため、内外の研究者、学芸員、古美術商等との連携を図り、迅速かつ的確な情報収集にも努め、それらを収集活動に効果的に反映していく。
(九州国立博物館)
日本とアジア諸国との文化交流を中心とした美術、考古及び歴史・民族資料等の中から重点的に購入する。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　冨坂　賢

【実績・成果】
・購入件数５件　内訳：絵画２件、書跡１件、陶磁１件、染織１件
・決算額 609,288,000 円
当館のテーマである日本とアジア諸国との文化交流の足跡を示す作品を収集した。作品として「絹本著色阿弥陀三尊像」、「紙本搨摸王羲之尺牘（妹至帖）」など優れた文化財を、あわせて５件購入した。

【補足事項】
・絵画分野では、２件を購入した。「絹本著色阿弥陀三尊像」は、阿弥陀浄土信仰を背景に、中国の杭州・明州で描かれた典型的な南宋時代の作例で、作品の優秀さとともに文化史的な価値も高い作品である。ついで、「伊勢物語図色紙」（現存 59 枚）のうちの１枚である「紙本著色伊勢物語図色紙　第七段　かへる波」は、江戸初期に活躍した絵師・俵屋宗達の真筆として高く評価される優品である。
・書跡分野では、「紙本搨摸王羲之尺牘（妹至帖）」を購入した。中国４世紀の王羲之の自筆書状（尺牘）を、唐時代に双鉤填墨という方法で精巧に複製したもの。「書聖」王羲之の書は、奈良時代に遣唐使船で将来され、日本の書の原点となった。本作品の丸みのある文字の造形は、平安中期の和様書法の基盤となるもので、日中の書の架け橋を象徴する名品である。
・陶磁分野では、「色絵唐花福寿文反皿」を購入した。元禄 12 年（1699 年）に肥前有田の柿右衛門窯が製作した特注の色絵皿で、独特の赤色は「元禄柿」と呼ばれる。近世陶磁史の重要な基準作である。
・染織分野では、「茜地獅子唐草文更紗茶具敷」を購入した。表地は「獅子手」と称されるインド製更紗、裏地は「かぴたん」と称される南方製の縞織物で、日本で茶具敷として仕立てられたものである。
・いずれも、日本と大陸の文化交流を物語る作例、あるいは時代の美意識や工芸技術の高さを示す優品である。


〔購入品〕紙本搨摸王羲之尺牘（妹至帖）

・収蔵品のうち「紙本著色病草紙断簡」（３幅１枚）、「大和国添上郡樽中郷家地手継券文（十六通）自天暦八年至長保四年」（１巻）の５件が重要文化財に指定された。

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
収蔵品件数	525件	－	－		453	474	493	512
うち国宝	3件	－	－		3	3	3	3
うち重要文化財	34件	－	－		29	29	29	29
購入件数	5件	－	－		17	18	15	14

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	「紙本搨摸王羲之尺牘（妹至帖）」など国立博物館として収集すべき作品と、文化交流を端的に示す作品とを、バランスよく収集した。

【中期計画記載事項】
体系的・通史的にバランスのとれた収蔵品の蓄積を図る観点から、次に掲げる各館の収集方針に沿って、外部有識者の意見等を踏まえ、適時適切な収集を行う。また、そのための情報収集を行う。
(九州国立博物館)日本とアジア諸地域との文化交流を中心とした、美術、考古資料及び歴史資料等を収集する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	文化交流を主軸に据えた作品の購入を、中期計画どおりバランスよく着実に実施できた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1121

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－2　寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用

【年度計画】
(4館共通)
1)寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。

担当部課	学芸研究部列品管理課	事業責任者	課長　救仁郷秀明

【実績・成果】
1) ○寄贈
・新規寄贈品件数 148 件
　内訳：絵画 3 件、書跡 27 件、彫刻 2 件、刀剣 11 件、陶磁 5 件、漆工 2 件、考古 5 件、歴史資料 7 件、東洋彫刻 9 件、東洋陶磁 5 件、東洋染織 2 件、東洋考古 48 件、東洋民族 22 件
○寄託
・新規寄託品件数 31 件
　内訳：絵画 8 件、書跡 7 件、刀剣 1 件、漆工 2 件、考古 4 件、東洋陶磁 6 件、東洋民族 3 件
・寄託品は新規に 31 件を受け入れ、返却23件のうち2件を寄贈品として受け入れ、2件を購入した。

【補足事項】
○寄贈
・作品の寄贈については24名の所蔵者から、148件の文化財を受け入れた。
・狩野山雪筆「双龍図」は新出作品であるが、山雪の基準印が押されており、作風も山雪のそれに合致するもので、展示効果も高く、価値が高い。
・帝国博物館の初代総長を務め、当館と関わりの深い九鬼隆一に関係する大量の未紹介資料の一括寄贈(歴史資料73点)を受けた。草創期の博物館と総長の活動をうかがわせる資料として活用することができ、寄贈の意義は大きい。
・西アジアの作品を中心とする大量の百瀬コレクションの寄贈を受けた。当館収蔵品の欠落を埋め、さらに充実させることができた。
○寄託
・作品の寄託については3機関9個人から、31件の文化財を新規に受け入れた。
・寄託品のうち、重要文化財は書跡1件(附 漆工1件)、刀剣1件である。

［寄贈品］
双龍図　２幅

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
新規寄贈品件数	148件	－	－		151	63	471	100
寄託品件数	3,072件	－	－		2,689	2,563	2,519	3,064
うち新規寄託品件数	31件	－	－		7	3	20	604
登録美術品件数	24件	－	－		3	2	23	25

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　A	大量の一括寄贈を受け入れ、新規寄贈は総計148件、点数にして550点を超えた。

【中期計画記載事項】
　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　A	本中期計画期間は、まれにみる大量の寄贈の受け入れが続き、収蔵品の充実を図ることができた。また寄託については国宝3件、重要文化財1件を含む大倉文化財団のきわめて良質なコレクションを受け入れ、展示の充実を図ることができた。

【書式A】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1122

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－2　寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用

【年度計画】
(4館共通)
1)寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。

担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長　宮川禎一

【実績・成果】
1)○寄贈
・新規寄贈品件数　405件
内訳：絵画6件、金工47件、陶磁204件、漆工132件、染織3件、考古5件、歴史資料8件
○寄託
・新規寄託品件数　232件
内訳：絵画135件、書跡25件、彫刻9件、金工16件、陶磁20件、漆工20件、考古2件、歴史資料5件
・絵画の新規寄託件数が突出している理由としては、中国絵画のまとまったコレクションを受託できたことが要因である。

【補足事項】
○寄贈
寄贈は405件で、寄贈者は9人である。
・絵画3件、陶磁201件、漆工127件、考古5件、歴史資料8件の計344件については、大阪府貝塚市で江戸時代から続いた商家から、26年度より引き続き寄贈されたものである。27年度の寄贈品は、様々な趣向の茶碗、皿、鉢、永田友治や長野横笛による蒔絵の重箱や膳椀など、茶事や宴席に用いる調度のほか、笙や近代の写真機や引き延ばし機などを含む。5つの土蔵に伝わる文化財の悉皆調査は、28年度も寄贈を前提として進められる予定である。

・金工47件の寄贈の内、12件は兵庫県の愛刀家蒐集のコレクションであり、35件は京都府の居合道師範蒐集のコレクションである。「槍　銘義助」や「黒漆太刀拵」などいずれも貴重な作品が含まれている。

○寄託
・新規寄託のうち指定文化財は、※重文「天蓋　大日如来坐像附属」、重文「木造地蔵菩薩像像内納入品」、重文「木造薬師如来立像」、国宝「剣　無銘　附黒漆宝剣拵」である。重文「木造薬師如来立像」においては今年度名品ギャラリーで展示することができ、今後も展示での活用が期待できるものである。
※既に同重文の本体である「大日如来坐像附属」が当館へ寄託されているため、新規寄託品件数には含むが、新規の重要文化財としてはカウントしない。

大阪府貝塚市商家からの寄贈品
(上)永田友治作、(下)笙・重箱

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
新規寄贈品件数	405件	－	－		24	86	13	379
寄託品件数	6,112件	－	－		6,013	5,914	5,892	6,001
うち新規寄託品件数	232件	－	－		93	73	70	162

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	寄贈、寄託とも、質・量のいずれにおいても極めて高い成果を上げており、平常展の充実に寄与している。

【中期計画記載事項】　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	中期計画期間において寄贈、寄託の受入を積極的に行い、収蔵品を順調に充実させることができた。 また、既存の寄託品についても展示し活用することができた。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1123

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－2　寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用

【年度計画】
(4館共通)
1)寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。

担当部課	学芸部	事業責任者	部長　内藤　栄

【実績・成果】
(4館共通)
1) 本年度は2件の寄贈を受け、7件の新規寄託を受け入れた。

【補足事項】
(4館共通) 1)
・寄贈を受けた文化財は以下のとおりである。
　錦幡　模造　2旒
　紅牙撥鏤尺　模造　1枚
・新規に寄託を受け入れた文化財は以下のとおりである。
　木造帝釈天坐像　1軀　室生寺
　木造二天王立像　2軀　室生寺
　重要文化財　木造阿弥陀如来坐像　1軀　善福寺
　木造阿弥陀如来坐像　1軀　善福寺
　木造観音・勢至菩薩立像　2軀　善福寺
　重要文化財　木造天蓋　附属　飛天像（縦笛、鈸子）　2軀　法隆寺
　国宝　法華経（一品経）　巻第三、巻第五　2巻　浅草寺

寄贈を受けた「錦幡　模造」

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
新規寄贈品件数	2件	－	－		0	1	25	0
寄託品件数	1,987件	－	－		1,945	1,951	1,994	1,984
うち新規寄託品件数	7件	－	－		12	13	49	7

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 寄贈品の受け入れ、新規寄託の受け入れ、ともに実績を上げることができた。今後もこれまで通り文化庁や地元教育委員会等多方面との連携し、新規寄託の増加と継続的寄託に努める。

【中期計画記載事項】
　収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 27年度は寄贈の受け入れを実施することができ、また新規に寄託品を受け入れることができた。いずれの品も平常展での活用が見込まれるものであり、中期計画に沿った実績を上げることができた。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1124

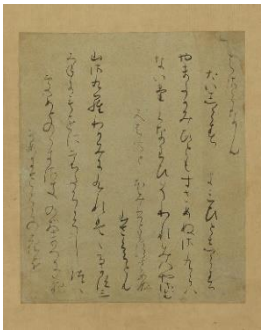
中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(1)－2　寄贈・寄託品の受け入れ及びその積極的活用

【年度計画】
(4館共通)
1)寄贈品及び寄託品の受け入れについては、文化庁とも連携を図り、登録美術品制度の活用を進めるなど、積極的に働きかけるとともに、平常展に必要な文化財の寄贈を受け入れる。併せて、継続的寄託及び新規寄託に努力する。

担当部課	学芸部文化財課	事業責任者	課長　冨坂　賢

【実績・成果】
1)寄贈
・新規寄贈品件数 8 件 内訳：絵画 1 件、書跡 2 件、金工 1 件、陶磁 2 件、考古 1 件、歴史資料 1 件
寄託
・新規寄託品件数 97 件 内訳：絵画 6 件、書跡 3 件、彫刻 1 件、建築 2 件、金工 82 件、漆工 1 件、考古 2 件

【補足事項】
寄贈
・8 件の寄贈があった。
・絵画分野では、「紙本金地著色鞨鼓催花図　六曲屏風」の寄贈を受けた。近世初頭の中国古典の受容のさまが窺える。なお、本作品は学界未紹介の新出の作例である。
・書跡分野では、2 件の寄贈があった。「紙本墨書朱舜水追悼文稿　安東省庵筆」は日本に亡命した明時代末の儒学者朱舜水の死を悼み、弟子で柳川藩儒の安東省庵による追悼文の草稿で、日中間の人物交流を物語る。「彩箋墨書古今和歌集巻第一断簡（関戸本）伝藤原行成筆」は、平仮名が最も美しさをそなえた時代の優品で、書における国風文化の精華を物語る。
・金工分野では、「柴垣群禽図肩衝釜」の寄贈を受けた。近世的な図様や薄手の造りが特筆される時代性豊かな作品である。
・陶磁分野では、2 件の寄贈があった。「白磁玉縁皿」は、8 世紀中国・唐時代の邢州窯の作で、大宰府や鴻臚館等の遺跡から出土例が知られるなど、遣唐使時代の日中交流を物語る。ついで「柿釉麒麟雲龍文大盤（餅花手）」は、16～17 世紀の中国福建省の漳州窯の作で、代表的な貿易陶磁といえる。


〔寄贈品〕彩箋墨書古今和歌集巻第一断簡（関戸本）伝藤原行成筆

・考古分野では、弥生時代の遺跡からも出土する、前 2～前 1 世紀の中国漢時代の「草葉文鏡」1 面の寄贈を受けた。
・歴史資料分野では、5・6 世紀朝鮮半島の三国時代の碑文から採った拓本の寄贈を受けた。「中原高句麗碑拓本」4 枚と「丹陽新羅赤城碑拓本」1 幅からなり、いずれも原碑は韓国の国宝指定を受け、現在は採拓が禁止されている。
寄託
・97 件の新規寄託があった。
・絵画分野では、日本で中世に愛好された中国の故事をテーマとする「紙本著色鳥龍白楽天問答図・黄龍呂洞賓問答図伝祥啓筆」、また、現存作品の少ない朝鮮時代の紙縑画の優品「紙本著色紙縑八馬図」、江戸時代の青木木米筆になる「紙本墨画淡彩天保九如図扇面」などの寄託を受けた
・金工分野では、「南善吉旧蔵鏡鑑資料」として全 82 件の寄託を受けた。本件は銅製古鏡の一大コレクションで、制作地域的には日本・中国・朝鮮半島、制作年代としては前 5～後 19 世紀までと幅広い。東アジア全体の文化交流や影響関係を物語ることができる資料群である。

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
新規寄贈品件数	8件	－	－		1	3	4	5
寄託品件数	885件	－	－		1,219	1,238	1,081	795
うち新規寄託品件数	97件	－	－		17	30	15	12
登録美術品件数	2件	－	－		0	0	0	2

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：A	文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、分野のバランスよく行うことができた。特に館蔵品の少ない金工分野の優品の寄託を受けることができた。

【中期計画記載事項】
収蔵品の体系的・通史的なバランスに留意し、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、積極的に活用する。また、既存の寄託品については、継続して寄託することを働きかけ、積極的に活用する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	文化交流を主軸に据えた寄託品・寄贈品の受入を、バランスよく行い、中期計画どおり着実に実施できた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1211

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－1 収蔵品の管理・保存

【年度計画】
（４館共通）
1）定期的に寄託品の所在確認作業を行う。
2）収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館）
1）文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。
（東京国立博物館）
1）収蔵品情報調査を継続して行う。
2）歴史資料・和書・古写真・ガラス乾板･館史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用･公開するための作業を進める。

担当部課	学芸研究部列品管理課 学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　救仁郷秀明 課長　高橋裕次

【実績・成果】
（４館共通）
1）　寄託品の所在確認作業を行い、所在情報を更新した。また、寄託の継続について寄託者の確認をとった。
2）　本格修理のための列品調査、対症修理の実施、列品貸与の点検として保存カルテを作成し、蓄積した。
（東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館）
1）文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新した。
（東京国立博物館）
1）収蔵品情報調査を継続して行った。
2）歴史資料等の旧資料部関係品を整理し、列品として編入活用･公開するための作業を進め、500件を編入した。

【補足事項】
（東京国立博物館）
○一時預品の調査確認作業(リスト作成、画像撮影)を行った。
○ICタグの収蔵品管理への導入について検討を行った。
○考古分野の収蔵庫2箇所について、収蔵品等の調査を実施した。

IC タグ導入の検討

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
保存カルテ作成件数 (23年度より計数方法変更)	1,432件	－	－		1,187	1,594	1,492	1,721

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 年度計画の目標とおりの成果を達成することができた。

【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に従い、かねてよりの課題であった古写真・ガラス乾板の保存・管理に関する検討に本格的に着手した。これにより、次期中期計画の遂行について見通しを立てることができた。

【書式Ａ】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1212

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－1 収蔵品の管理・保存

【年度計画】
収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。
(4館共通)
1)定期的に寄託品の所在確認作業を行う。
2)収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館）
1)文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。

担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長　宮川禎一

【実績・成果】
(4館共通)
1)年2回行う寄託品の継続手続きにあわせて、所在確認作業を実施した。
2)・貸与に伴う点検時を主体として作成を行っている館蔵品の保存カルテの作成を継続して行い、90件作成した。
・収蔵品の貸与記録及び当館における平常展、特別展の展示記録を文化財情報システムへ登録した。
(東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館)
1)購入品、寄贈品、新規寄託品等、文化財情報システムの収蔵品データを更新した。
○26年度に完了した平成知新館収蔵庫への作品移動について、収蔵庫内で整理作業を行い、収蔵空間の効率的な活用に取り組んだ。
○文化財情報システムについて、入力情報の精査を行い、適宜修正を施した。
○京都国立博物館ウェブサイト内の「館蔵品データベース」掲載の館蔵品の画像の一部について、トリミング等修正を行った。
○新しく導入した水平方向の高精細スキャナー（「オルソスキャナー」）を活用し、損傷の著しい掛幅の書画や錫杖等の縦に長い形状の作品の撮影を行った。
○新規寄贈品・寄託品を中心に、収蔵庫搬入前に酸化エチレン製剤「エキヒュームＳ」による燻蒸庫燻蒸を実施した。
○文化財燻蒸に伴う安全管理を徹底する目的で「京都国立博物館燻蒸業務委託概要」を作成し、関係者の役割分担を明確にした。
○「環境モニタリングシステム」を活用し、平成知新館の温湿度環境の維持・改善や、展覧会の会場計画に役立てた。

【補足事項】
(4館共通)
2)館蔵品・寄託品貸与実績の詳細については処理番号3412を参照。
○収蔵品等の撮影実績の詳細については処理番号2422を参照。

環境モニタリングシステムのモニタリング画面

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
保存カルテ作成件数	102件	－	－		249	215	253	204

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	26年度に取り組んだ課題について作業の効率化を図ることができた。

【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：B	作品の写真・データの蓄積件数は外部からの貸出申請に合わせて変動するため、27年度は減少したが、博物館活動を充実させるため写真・管理データを中期計画に対し順調に蓄積できた。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1213

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－1 収蔵品の管理・保存

【年度計画】
収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。
(4館共通)
1)定期的に寄託品の所在確認作業を行う。
2)収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
（東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館）
1)文化財情報システム（業務システム）の運用を継続し、収蔵品データを更新する。
（奈良国立博物館）
1)文化財保存修理所を円滑に運用して、文化財の積極的な保存修理を図る。

担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長　鳥越俊行

【実績・成果】
(4館共通)
1)
・寄託品の移動時に、保存修理指導室及び列品室の所定フォームに基づく日時連絡を徹底した。
・2ヵ月に1回実施している収蔵庫内環境チェック時、及び年末の収蔵庫査察時に寄託品の所在確認を行った。
2)保存カルテの作成
・文化財の個別写真を添付した保存修理指導室で作成･保管するフォームを用いて100件の保存カルテを作成した。
（東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館）
1)収蔵品データベースの運用を継続し、個別データの追加等更新を行った。
（奈良国立博物館）
1)文化財保存修理所の運用
・文化財保存修理所運営委員会を27年5月7日に開催し、文化財保存修理所の円滑な運用を進めた。
・学芸部と文化財保存修理所において、修理に従事する公益財団法人美術院、株式会社文化財保存、北村工房の3工房代表者と文化財保存修理所協議会を27年9月3日及び28年2月25日に開催し、各工房の修理事業実施状況、修理所施設の維持・管理、工房内の温湿度をはじめとする保存環境改善に関する課題などを討議した。
・館長以下博物館職員が定期的に文化財保存修理所各工房の修理実施状況を視察する修理所巡回を2回実施した。

【補足事項】
・27年12月22日から28年1月17日まで当館西新館北第1室において特集陳列「新たに修理された文化財」を開催し、26年度に文化財保存修理所各工房などで修理が完了した当館収蔵品・寄託品を修理解説パネルとともに展示(7件)することで、文化財修理技術を広く一般に理解してもらう機会とした。
・文化財保存修理所の施設や事業の概要を紹介する案内パンフレットを、修理所公開や国内外の修理専門技術者による修理所視察などの機会に配布した。
・28年1月14日に文化財保存修理所一般公開を開催し、修理所各工房の活動を広く知ってもらう機会とした。

「新たに修理された文化財」展の展示風景

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
保存カルテ作成件数	100件	－	－		130	127	120	115

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 寄託品の定期的な所在確認により管理が図られた。また文化財の個別写真を添付したフォームを用いた保存カルテを順調に作成した。

【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 収蔵品データベースはデータを追加しつつ運用を継続した。文化財保存修理所も円滑に運用することで、文化財に対して積極的な保存修理を実施し、中期計画を順調に実施した。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1214

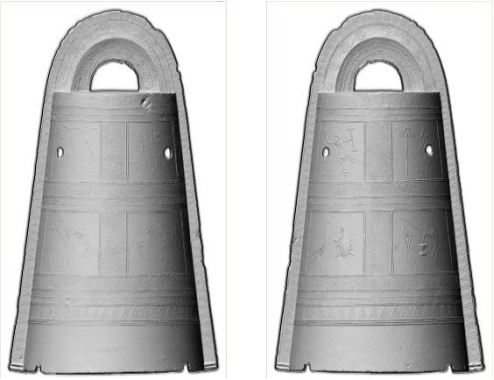
中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－1 収蔵品の管理・保存

【年度計画】
収蔵品の保存・管理を徹底するとともに、現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。
(4館共通)
1)定期的に寄託品の所在確認作業を行う。
2)収蔵品を中心とした保存カルテを作成する。
(九州国立博物館)
1)博物館科学・保存修復諸室を計画的に運用し、文化財の適切な保存・積極的活用を図る。
2)文化財情報（収蔵品データベース、寄託品・借用品データベース、画像データベース）の一元的管理が可能な業務システム構築を図る。

担当部課	学芸部博物館科学課 学芸部文化財課	事業責任者	課長　今津節生 課長　冨坂　賢

【実績・成果】
(4館共通)
1)出品期間の更新または返却の時期に合わせて所在確認作業を行った。
2)収蔵品及び修理完了資料を中心とした保存カルテを91件作成した。
(九州国立博物館)
1)収蔵品・展示品を中心にＸ線ＣＴスキャナ・３Ｄデジタイザを用いて三次元データを取得して保存状況と構造調査を実施した。また、研究成果を紹介するシンポジウムを実施した。その他、保存修復施設を運用し、計画的な保存修理事業を進めた。
2)列品・寄託品・借用品・画像などの各データベースを一元管理するシステムを新規に構築し運用を開始した。

【補足事項】
(九州国立博物館)
1)神戸市博物館所蔵の桜ヶ丘5号銅鐸をＸ線ＣＴスキャナと３Ｄデジタイザで三次元計測し、これを３Ｄプリンタで出力して触れる複製品として展示した。（特別展「美の国　日本」）また、同様にＸ線ＣＴと３Ｄデジタイザで三次元データ化した西光寺梵鐘を３Ｄプリンタで出力し、これを原型として鋳型の外型を製作し鋳造の研究に用いた。その他、文化交流展示室の展示のために借用した青銅鏡についてＸ線ＣＴスキャナと３Ｄデジタイザで計測を行い、状態調査ならびに古代青銅鏡の変遷に関連する研究を行った。


桜ヶ丘５号銅鐸の三次元計測による側面図

2) 27年度より運用を開始した「文化財情報システム」は、収蔵品・寄託品のみならず、出入りの多い借用品や画像を取り扱うための仕組みが組み込まれている。また、同システム内には陳列情報を管理する機能を有しており、これらの各機能間での相互連動性は高い。今後は実務・研究へのより効果的な活用のため拡張の方向性を検討・具体化しつつ、安定的かつ適切にデータを継承できるようシステム及び内包するデータを整備し洗練させる。

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
保存カルテ作成件数	91件	－	－		107	91	94	75
CTスキャン調査	55件	－	－		60	59	58	64
三次元計測	67件	－	－		55	34	43	53

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	カルテの作成や保存修復諸室の活用など実施でき、年度計画を概ね達成している。

【中期計画記載事項】国民共有の貴重な財産である文化財を永く次世代へ伝えるため、収蔵品の保存・管理を徹底する。現状を確認の上、写真・管理データを蓄積して、展示・研究等の業務に活かし、博物館活動を充実する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	文化財を永く次世代に伝えるため、保存・管理・調査等を中期計画どおり着実に実施することができた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1221

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－2　施設の環境整備

【年度計画】

展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。

(4館共通)

1)収蔵品の生物被害を防止するため、ＩＰＭ(総合的有害生物管理)の徹底を図る。

(東京国立博物館)

1)本館収蔵庫の整備計画を作成しつつ、既存収蔵庫のセキュリティ強化、環境改善の工事を実施する。

2)収蔵品の保存と展示に関する環境について全館的視野にたって調査研究を進め、環境データの解析・蓄積を行う。

3)展示場及び収蔵庫における地震対策の再検討と改善を図る。

4)収蔵庫、展示室の温湿度、汚染気体など保存環境に関する年次報告を整備する。

5)輸送中の文化財に生じる振動及び衝撃に関する計測と調査を実施する。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　高橋裕次

【実績・成果】

(4館共通)

1)収蔵庫など306地点における生物生息状況を夏季に調査した。また、ゴキブリなどの生活害虫を防除するため、夏季に防虫薬剤を全館に設置した。

(東京国立博物館)

1)本館に存在する収蔵庫18箇所の収蔵実態について環境レベル分けを行ない、本館の全館改修工事を行なう場合の各収蔵庫に対する改修仕様案を作成した。

2)収蔵庫及び展示室など308地点の温湿度を計測し、環境の評価及び処置を実施した。空気環境に関しては、収蔵庫及び外気など11地点におけるアルデヒド類及び有機酸類などを計測し、蓄積した。

3)法隆寺宝物館の改修に際して、太子絵伝を始めとする収蔵品に対して、安全性を高めた展示支持具を新たに設計した。また、これまでの成果を踏まえた上で中国、韓国の研究者と地震対策に関する研究会を開催し、博物館における防災についての研究を進めた。

4)収蔵庫、展示室など249ヵ所の温湿度、及び11地点の空気汚染物質濃度に関し年次報告書を整備した。

5)特別展開催や収蔵品の貸与に伴う輸送中に生じた振動及び衝撃に関する計測を実施し、8つの計測データを収集した。また、これまでの成果を東京国立博物館紀要51号に論文としてまとめ、刊行した。

収蔵庫内の空気環境計測

【補足事項】

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	生物生息、温湿度、輸送中の振動、免震装置の効果などに関する調査と検証を実施し、文化財を保存するための環境の整備に役立てた。

【中期計画記載事項】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	中期計画に従い、各種の環境データの集積と解析によって、展示・収蔵スペースの保存環境の質的向上と環境改善を効果的に進めることができた。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1222

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－2　施設の環境整備

【年度計画】
展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。
(4館共通)
1)収蔵品の生物被害を防止するため、ＩＰＭ(総合的有害生物管理)の徹底を図る。
(京都国立博物館)
1)仮設収蔵庫（東収蔵庫）を減築し、隣接する諸施設と調和する外観にするとともに、長期的に継続使用するための改修に向けた設計を行う。
2)明治古都館（本館）の免震補強ほかの改修に向けた基本計画策定の検討を行う。
3)平成知新館の温湿度など、展示・保存環境に関わる調査研究を行う。

担当部課	学芸部列品管理室 総務課	事業責任者	室長　宮川禎一 課長　植田義雄

【実績・成果】
(4館共通)
1)・年間を通じて、収蔵庫での網羅的な昆虫生息調査を行った。また、温湿度モニタリングを継続して行った。
・日常清掃のための備品を拡充した。
(京都国立博物館)
1)仮設収蔵庫（東収蔵庫）の機能改善及び減築する中で収蔵スペースを極力確保する計画とした。デザインコードに基づき景観を配慮した設計とした。
2)明治古都館（本館）の免震補強、設備の改善、消火設備等を考慮し展示の他イベントや各種サービスの拡充も視野にいれた基本計画を策定した。
3)平成知新館・明治古都館・東収蔵庫・北収蔵庫、それぞれの施設の特性にあわせた、保存環境の管理・整備を行った。

【補足事項】
○温湿度環境：平成知新館では、「環境モニタリングシステム」、明治古都館・東収蔵庫・北収蔵庫では、温湿度データロガーを活用し、温湿度環境を分析し、空調設定や運転計画に役立てた。また、毛髪式自記温湿度記録計を併用して日常管理を行っている。
○虫菌害対策：27年度行った昆虫生息調査は、平成知新館の展示室・収蔵庫で計200ヵ所・3回、明治古都館収蔵庫・北収蔵庫で計86ヵ所・3回、東収蔵庫で計74ヵ所・2回、明治古都館展示室で30ヵ所・1回のほか、適宜範囲や場所を拡大して実施した。日常の目視点検は、館内職員・監視員の協力を得て行われた。また、一部収蔵庫で付着菌・浮遊菌の調査を実施した。
○空気環境対策：平成知新館の開館から1年が経過したため、一部で有機酸・アンモニアの濃度を調査し、休館期間を利用して展示ケース内の換気を実施し空気環境の維持を図った。

展示ケースの空気環境測定風景

既設東収蔵庫

改修後東収蔵庫
（イメージ図）

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	施設の特性にあわせた保存環境の管理・整備を行い、温湿度等への対策を順調に行っている。

【中期計画記載事項】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：Ｂ	今中期期間において、平成知新館を開館した。また、施設の老朽化に対応するための設計、検討を行い、環境整備を順調に進めた。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1223

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－2　施設の環境整備

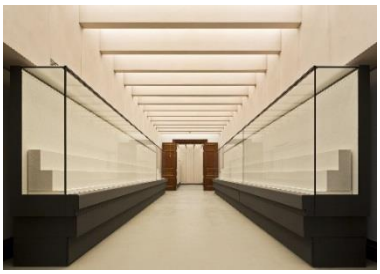
【年度計画】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。
(4館共通)1)収蔵品の生物被害を防止するため、ＩＰＭ(総合的有害生物管理)の徹底を図る。
(奈良国立博物館)1)展示室及び展示ケースの温湿度管理について、無線ＬＡＮによるデータ管理システムを更に充実させる。
2)展示ケース内の温湿度・粉塵量などを継続的に計測し、ケースの調湿性能や気密性能の向上を図る。
3)収蔵庫及び展示室の適正な温湿度管理の徹底を図る。
4)なら仏像館の展示ケースの改修を行う。

担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長　鳥越俊行

【実績・成果】(4館共通)
1)・館内の文化財害虫生息状況を把握するため、文化財の保管および展示にかかわる箇所を中心に、昆虫調査用トラップを2ヵ月に1回設置・回収し、調査結果の蓄積・分析を行うことでIPMを推進した。
・文化財害虫の生息が確認された展示ケースや展示台に防虫シートを設置し、併せて展示施設の周囲に害虫忌避剤を散布した。
・収蔵庫周辺や展示室内、調査室内の衛生環境保持のため、掃除と防塵マット交換を定期的に実施した。
(奈良国立博物館)
1)コンピューターの更新などを進めてデータ管理システムの充実を図るとともに、展示室および展示ケース内の温湿度管理のため導入した無線ＬＡＮによるリアルタイム温湿度管理システムの運用から正倉院展のような多数の観覧者がもたらす展示環境の変化に科学的データを以て即時に対応した。
2)・展覧会ごとに展示レイアウトに応じて無線ＬＡＮ温湿度センサーを設置し、期間中に得られたデータを展示終了後に分析して今後の参考資料とした。
・正倉院展終了直後の27年11月10日に、毎年継続的に実施している展示ケース内の粉塵調査を宮内庁正倉院事務所研究員とともに行った。
・東新館の壁付ケースについて、パッキンやシールの追加などを行い気密性の向上を図った。
3)収蔵庫前共用スペースの空調を更新し、収蔵庫入退室時の収蔵品への温湿度負荷の低減を図った。また、無線ＬＡＮ温湿度管理システムによる展示室温湿度の24時間リアルタイムモニタリングを進め、年間を通じて相対湿度６０％前後を維持した。
4)免震性能を有した新たな最新の展示ケースを導入したことにより、保管環境として安全性が向上した。また透過性の良いガラスの使用やＬＥＤ照明の使用等によって、より良い観覧・展示環境が実現できた。

【補足事項】
・展示室、収蔵庫や文化財保存修理所など館内150ヵ所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により2ヵ月に1回設置・回収を行い、回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の捕獲数データを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される箇所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などＩＰＭの実践につなげた。
・機械式自動調湿装置を内蔵した展示ケースを使用することで、多数の観覧者による展示ケース内の急激な温湿度環境変化を緩和し安定した展示環境を保つことができた。

なら仏像館展示室(1)


なら仏像館展示室(2)

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 昆虫調査用トラップの調査結果の蓄積・分析によりIPMを推進できた。また、展示室湿温度の24時間リアルタイムモニタリングによる適正な環境の維持、なら仏像館の改修により展示ケース等の免震性能を備える等、文化財の保存・管理を行った。

【中期計画記載事項】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】中期計画に沿って、保存･管理のために、温湿度・生物生息等に対する計画的な対策を実施した。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1224

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(2)－2　施設の環境整備

【年度計画】
展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境を整備する。
(4館共通)
1)収蔵品の生物被害を防止するため、ＩＰＭ(総合的有害生物管理)の徹底を図る。
(九州国立博物館)
1)館内の温湿度・空気質・生物生息など保存環境に関するデータを蓄積する。
2)全館的視野に立った陳列品の展示・保存環境に係る調査研究を進め、環境データの蓄積・解析を行う。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　今津　節生

【実績・成果】
(4館共通)
1)収蔵品の生物被害を防止するため、ＩＰＭの徹底を図った。文化財搬入に際し、ＩＰＭメンテナンスに基づく収蔵準備作業を実施すると共に、必要に応じて殺虫殺黴処理を実施した。
(九州国立博物館)
1)無線温湿度モニタリング装置を活用してデータを蓄積した。収蔵庫、諸室等館内約430ヵ所にトラップを設置し、虫の侵入を調査して保存環境の改善を行った。
2)収蔵庫においても無線温湿度モニタリング装置を活用して環境データ取得の効率化を図った。
・運搬・展示の環境データを解析することで、正倉院・大英博物館などから借用した文化財を安定した状態で展示することができた。

【補足事項】
・温湿度データの管理、解析によって27年度も展示、収蔵環境をより安定させることができた。今後も安定を維持しつつ、より一層の効率化を図りながらエネルギーの削減に寄与したい。
・収蔵庫、展示室、諸室等の約430ヵ所に常時粘着トラップを設置し年間を通して、2週間おきに定期的モニタリングを実施した。害虫侵入箇所と館内の害虫の生息状況を早期に発見対処する体制を維持した。
・地元のＮＰＯ法人ミュージアム（ＩＰＭサポートセンター）やボランティアとの連携に努め、文化財の適切な管理・保存について市民や地域の理解を深めた。展示室等一般来館者エリアの温湿度記録や粘着トラップの観察には、27年度も引き続き両者の協力を得た。
・ミュージアムＩＰＭ研修等を実施することにより、市民ボランティアやＮＰＯ法人等によるＩＰＭ活動へのさらなる指導を進めることができた。
・殺虫殺黴処置は、特別展やトピック展あるいはイベント用資料等の借用や持ち込み資料についての対応である。内訳は薬剤くん蒸処置1件、二酸化炭素処置4件、低酸素法処置5件、調湿温風処理1件、低温処理1件。調湿温風処理、低温処理については、27年度、新たな処置法のオプションとして導入したものである。
・生物モニタリングを継続して観察を進め、それらのデータを活用することによって適切な対策に生かしている。27年度は、特別展示室バックヤード一部の徹底清掃、文化交流展示室の造作下の徹底清掃、一部の扉下に侵入防止ブラシを付加するなどの対応を実施した。

IPM の一環としての
展示室の徹底清掃の様子

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
殺虫殺黴処置	12件	－	－		6	6	10	9

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 温湿度計測データを活用し、各展覧会のニーズに合わせて適切な展示環境、収蔵環境の維持をすることができた。また、これまで積み上げてきたＩＰＭ関係の調査結果を利用して、対策を立て実施することができた。

【中期計画記載事項】展示場、収蔵庫の老朽化に対応するとともに、温湿度、生物生息、空気汚染、地震等への対策を計画的かつ速やかに実施し、保存・管理・活用のための環境整備を行う。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 新システムの導入（温湿度モニタリング装置）、地道な粘着トラップによる生息調査、環境のモニタリングにより、確かな環境整備を行うことができ、中期計画を順調に実施できた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1311-1

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　　①　計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】
修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。
(4館共通)
1) 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから77件（東京：40、京都：10、奈良：8、九州：19）の本格修理を実施する。
(東京国立博物館)
1)引き続き国宝・重要文化財の中長期修理計画を策定する。
2)保存修復関係資料(26年度修理実施分)のデータベース化を図る。(70件)

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　高橋裕次

【実績・成果】
1)紙本などの修理技術者として保存修復課に2名のアソシエイトフェローを配置し、館内で実施する館蔵品の本格修理、応急(対症)修理を本格化させた。作品の劣化予防のために543件の応急修理を実施し、緊急性の高いものから86件の本格修理を実施した。うち国宝3件、重要文化財1件、未指定品4件は寄附金による本格修理である。
(東京国立博物館)
1)修理計画立案に向け、国宝・重要文化財を含む305件の作品に関して修理仕様の検討を行い、中長期修理計画策定を進めて、86件の本格修理を実施した。
2)データベース構築のために、27年度に修理が完了した90件の修理内容についてデジタル化を実施し、その成果をもとに『東京国立博物館文化財修理報告書XVI』を刊行した。

【補足事項】
・国宝「医心方」（平安～江戸時代）独立行政法人国立文化財機構文化財保存活用基金により、修理を開始した。
・国宝「鷹見泉石像」（江戸時代）、「坪内老大人画稿」（江戸時代）、「坪内老大人像」（江戸時代)はバンク・オブアメリカからの寄附金により修理を開始し、継続して修理を行ない、完了した。
・国宝「雪景山水図」（南宋時代）は増井久代氏からの寄附金により修理を行い、完了した（25年度着工）。
・①重文「放犢図」（元時代）、②「大燈籠」（明治時代）、③「河童形土偶」（縄文時代(中期)・前3000～前2000年）は飯田貞子氏からの寄附金により修理を開始し、①③は完了し、②は継続して修理を行なった。
・文化財保存修復学会第37回大会(27年6月27日、京都)において「被災文化財等救援活動における保存修理―洋紙作品の安定化処理の試み―」「被災文化財等救援活動における保存修理―麻布製カンバスに描かれた油彩画の脱塩の試み」「津波により被災した漆工芸作品の脱塩処理方法の検討」を発表した。
・文化財保存修復学会第37回大会(27年6月28日、京都)において「東京国立博物館蔵　渡辺崋山筆《坪内老大人像画稿（1幅　紙本墨画淡彩)》の修理事例―貼紙のある掛軸装の修理後装丁について」を発表した。

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
修理件数（本格修理）	86件	40件	A		106	95	93	78
データベース化件数	90件	70件	A		114	83	84	61

【年度計画に対する総合評価】 評定：　A	【判定根拠、課題と対応】 緊急性の高い本格修理及び対症修理、計画立案のための事前調査を計画的に実施し、厳しい経済的事情の中で、国宝3件、重要文化財6件を含む修理を実施し、当初の予定を上回る内容の成果をあげた。また、関係資料のデータベース化も進めた。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に従い事前調査、対症修理、本格修理の各段階で保存科学と修理技術が連携して保存修理事業にあたり、博物館活動に対して最適な作品修理を行うことができた。

【書式A】　　施設名 京都国立博物館　　処理番号 1312-1

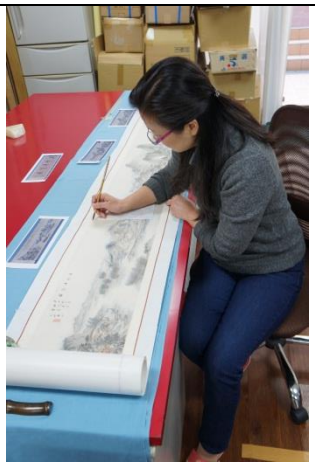
中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　　①　計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】
　修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。
(4館共通)
1)　文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから77件（東京：40、京都：10、奈良：8、九州：19）の本格修理を実施する。
(京都国立博物館)
1)中長期的修理計画の策定を検討する。
2)収蔵品修理資料のデータベース化に向けた調査を進める。

担当部課	学芸部列品管理室 学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長　宮川禎一 室長　大原嘉豊

【実績・成果】
(4館共通)
1)・本格修理実績　12件　内訳　絵画3件、金工2件、漆工1件、染織5件、歴史1件
　・上記の実績のうち、8件が新規案件である。
　・絵画1件と、漆工1件について、担当研究員及び修理請負候補者選定委員による工程検査を行い、修理が適正に実施されていることを確認した。
(京都国立博物館)
1)中長期的に修理を要する館蔵品リストの更新を行った。
2)26年度に引き続き、「文化財情報システム」運用の改善に努め、収蔵品の修理情報の効率的な活用を目指した。
○文化財保存修理所では、27年度は113件の新規修理文化財の搬入がありデータベース化を行った。また、過去のデータに関して1,378回追加、更新を行った。

【補足事項】
(4館共通)
1)・黄均筆「江邨漁隠図巻」の絵画1件は、修理して展示することを前提に26年度に寄贈を受けたものである。修理前は本紙と題字部分が分離し、本紙各所に亀裂やカビが生じており、展示に供する状態ではなかったが、今回の修理で本来の淡彩の美しさがよみがえった。
　・列品修理の途中経過について、28年1月に黄均筆「江邨漁隠図巻」の修理請負候補者選定委員と担当研究員による修理工程検査を実施した。また、26年度から継続修理中の「花鳥蒔絵螺鈿箪笥」については、27年8月に修理工程検査を実施した。


黄均筆「江邨漁隠図巻」の修理風景

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
修理件数(本格修理)	12件	10件	A		10	13	15	11
文化財修理データベース化件数	113件	－	－		118	93	101	113

【年度計画に対する総合評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	修理を前提とした寄贈を受けることで、収蔵品の充実も図ることができた。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】	【判定根拠、課題と対応】
評定：　B	修理件数の目標値を達成し、中期計画に対し順調に成果を上げた。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1313-1

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　①　計画的な修理及びデータの蓄積

【年度計画】
修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。
(4館共通)
1) 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから77件（東京：40、京都：10、奈良：8、九州19）の本格修理を実施する。
(奈良国立博物館)
1)引き続き修理の中長期的計画に基づき修理を実施する。
2)修理資料のデータベース化を図る。
3)寄託の継続を図る必要性の高い寄託品について修理を実施する。

担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長　鳥越俊行

【実績・成果】
(4館共通)
1)・館蔵品本格修理11件のうち、新規7件、26年度からの継続事業4件を実施した。
内訳　絵画4件　（※うち紙本著色泣不動縁起、絹本著色東大寺曼荼羅の2件は2ヵ年継続事業の最終年度。）
書跡1件
彫刻3件　（※木造如来立像、木造僧形神坐像、木造女神坐像の3件は1ヵ年で修理完了。）
染織2件　（※うち国宝 刺繍釈迦説法図1件は4ヵ年継続事業の最終年度。）
考古資料1件
・年度内に8件が完了した。
(奈良国立博物館)
1)22年度に策定した館蔵品の長期修理計画に基づき、計画通りに館蔵品修理を実施している。
2)修理報告資料を整理し、データベース化を進めた。また、当館紀要『鹿園雑集』に内包する形で報告していた文化財保存修理について、単体での報告書「奈良国立博物館文化財保存修理報告書（仮称)」を28年度に刊行すべく編集作業を進めた。
3)寄託品4件について、寄託所蔵者と協議を行い当館の推薦による財団助成を受けて修理を実施した。

【補足事項】
・展示会場入口に設置した募金箱の寄附金を収蔵品の修理費に使用し、木造毘沙門天立像（髙尾地蔵堂寄託品）、木造僧形神坐像、木造女神坐像の３件の修理を実施した。
・寄託品修理については、出光文化福祉財団の助成による京都・海住山寺所蔵 絹本著色大威徳明王像、朝日新聞文化財団・出光文化福祉財団の助成による滋賀・聖衆来迎寺所蔵 刺繍阿字図の2件について新規着工し、刺繍阿字図は27年度末で修理が完了した。

募金箱の設置状況

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
修理件数(本格修理)	11件	8件	A		11	9	8	9
文化財修理データベース化件数	66件	－	－		54	70	73	77

【年度計画に対する総合評価】 評定： B	【判定根拠、課題と対応】 本格修理は目標を達成し、データベース化件数は概ね予定通り実施した。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】 評定： B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、収蔵品に対しては、財団助成や募金などを活用し、緊急性の高いものから順次修理を実施した。

【書式Ａ】　施設名 九州国立博物館　処理番号 1314

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　①計画的な修理及びデータの蓄積　②科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
①修理、保存処理を要する収蔵品等については、外部の専門家等との連携の下、緊急性の高い収蔵品から順次、計画的に修理する。
(4館共通)
1) 文化財の応急修理に積極的に取り組み、劣化の予防に努め、緊急性の高いものから77件（東京：40、京都：10、奈良：8、九州19）の本格修理を実施する。
(九州国立博物館)
1)博物館科学・保存修復諸室の積極的活用を図る。
2)修理資料のデータベース化の調査を実施する。
②伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。
(4館共通)
1)紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
2)修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、Ｘ線透過撮影などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。

担当部課	学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　今津節生

【実績・成果】(4館共通)
①　1)館所蔵品を中心に、展示や損傷の程度を勘案して緊急性の高い文化財31件(本格22件,応急9件)を修理した。
(九州国立博物館)
1)館外所蔵者負担による九州等所在文化財の修理37件のために修復施設を積極的に活用した。館費修理とあわせて68件の修理を実施した。なかでも当館寄託品の久留米市指定文化財「楊柳観音図」(梅林寺所蔵)や、文化交流展で借用していた丹波市指定文化財「涅槃図」(妙法寺所蔵)の修理が実施され、保管や展示などの核となる博物館に修復施設が設置されている利点を十分生かせた。
2)修理報告書及および修理経過を示す画像データを整理して、データベース化に備えた。
②1)重文「対馬宗家関係資料」(当館所蔵)等紙文化財の繊維同定を行い、文化財毎に適切な補修紙を作成することができた。
2)国宝「栄花物語」(当館所蔵)について解体時に発見された旧表紙と思われる紙片に残る金属箔の蛍光X線分析を行なうなど、修理中でしか行うことのできない調査を実施することができた。

【補足事項】(4館共通)
1) 館費による修理件数31件(本格22,応急9)
(絵画14(本格9,応急5)、書跡1(本格1)、染織6(本格6)、歴史資料5(本格3,応急2)、考古2(本格1,応急1)、民族資料2(本格2)、その他1(応急1)
(九州国立博物館)
・修復施設1～4（3のみ4月～12月）では、国宝修理装潢師連盟が館所蔵品20件の他、国宝「琉球国王尚家関係資料」の文書記録類（那覇市所蔵）や重文「田能村竹田関係資料」（大分市美術館所蔵）など、合計52件の修理を実施した。
・修復施設3(12月～3月)では、修理工房宰匠が重文「扶桑略記巻第二十」（文化庁所蔵）の他、合計2件の修理を実行した。
・修復施設5では、芸匠が館所蔵品2件の他、重文「吉武高木遺跡Ｍ２号出土銅剣」（文化庁所蔵）など合計5件の修理を実施した。
・修復施設6では、大西漆芸修復スタジオが館所蔵品1件の他、重文「白鞘入剣」の外箱・白鞘（宇佐神宮所蔵）など、合計9件の修理を実施した。

重美・両界曼荼羅の修理風景

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
修理件数(本格修理)	22件	19件	B		19	20	17	23
文化財修理データベース化件数	－	－	－		－	－	－	－
修復施設の活用(補助事業等)	37件	－	－		19	22	29	31
表具裂データ	4件	－	－		0	0	10	2
科学的調査	16件	－	－		24	11	10	12

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 伝統的な修理技術と科学的な保存技術を取り入れた修理を実施することができた。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画に沿って、伝統技術に科学技術を取り入れながら計画的に修理を実施できた。

【書式Ａ】　施設名 東京国立博物館　処理番号 1311-2

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　　②　科学的な技術を取り入れた修理

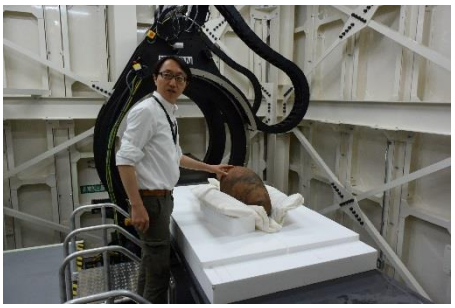
【年度計画】
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。
(4館共通)
1)紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
2)修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、赤外線撮影、Ｘ線透過撮影、三次元蛍光分光分析などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
(東京国立博物館)
1)Ｘ線ＣＴスキャナーを運用し研究の進展を図り、より適切な修理方法、展示、輸送に関する検討する。

担当部課	学芸研究部保存修復課	事業責任者	課長　高橋裕次

【実績・成果】
1)絵画、書跡などの本紙あるいは敷き紙などについて、植物繊維の同定を5件（A-12439年中行事図屏風など)実施し、本紙の保存に関して検討を行った。
2)修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析60件、1,755箇所（B-3178 医心方など)、Ｘ線透過撮影　248件、387カット(J-20465有柄鉄斧など)、赤外線撮影　1件28カット(A-12435柿本人麻呂像)、三次元蛍光分光分析　2件、20箇所（P-419旧江戸城写真帖）の科学的調査を実施した。これらの結果を構造調査と修理設計に役立てた。
(東京国立博物館)
1）Ｘ線ＣＴスキャナーシステムで館内外の文化財に対して75件（H-86八橋蒔絵螺鈿硯箱など）275回撮影を行った。

【補足事項】

・東京国立博物館でもより深い文化財調査を行うべく、性能の違う３台のＸ線ＣＴスキャナーを 26 年度に設置し、27 年度から運用が本格化した。



修理前作品の状態調査

調査研究活動における構造調査

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 従来のＸ線透過撮影に加えＸ線CTスキャナーの導入により立体文化財の内部構造や状態の確認が出来るようになり、修理前調査や作品研究において精度の高い情報を用いて行うことができるようになった。また、蛍光Ｘ線線分析や赤外線撮影などの基本的な調査分析も文化財の保存や修理、研究において価値のある調査であり、引き続き精度の向上とデータの活用方法の発展が期待できる。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】 立体から平面まで様々な文化財の保存状態確認のための科学的調査を修理技術者、学芸研究者らと共に実施し、修理の仕様策定、作品研究と展示における調査結果の活用などに結びつけることが中期計画に従い、順調に実施できた。

【書式Ａ】　施設名 京都国立博物館　処理番号 1312-2

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　②科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。
(4館共通)
1)紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
2)修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、赤外線撮影、Ｘ線透過撮影、三次元蛍光分光分析などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
(京都国立博物館)
1)引き続き文化財材質分析システム等を整備する。

担当部課	学芸部列品管理室	事業責任者	室長　宮川禎一

【実績・成果】
(4館共通)
1)・24年度より朝日新聞文化財団の助成にて修理を継続している国宝「病草紙」について、最終年度にあたり、紙質調査の成果の結果と仕上げの状況について確認を行った。
2)・マイクロフォーカスＸ線装置、蛍光Ｘ線分析装置などで、文化財の調査を行った。内部構造及び材料等が解明し、修理指針の検討を行うことができた。
・重文「二十五菩薩来迎図扉絵」(京都・禅林寺蔵、寄託品)修理に際して、透過Ｘ線撮影を行い、表面彩色層に隠れて見えない構造の分析を行い、設計指針に役立てた。
(京都国立博物館)
1)27年度は、新たに分光測色計、分光器、デジタルマイクロスコープ、Ｘ線発生装置などを購入し、文化財材質分析システムの整備を進めた。

【補足事項】
(京都国立博物館)
1)導入した機器については27年度試験運用を行った。本格的な運用については28年度以降進める予定である。

Ｘ線ＣＴ調査風景

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
科学的調査	19件	－	－		－	1	1	6

【年度計画に対する総合評価】 評定：Ａ	【判定根拠、課題と対応】 分析機器の整備を進め、積極的に多分野での試験運用を行った。研究データの蓄積とともに、科学的な保存技術を取り入れた修理のための準備を順調に進めている。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】 評定：Ｂ	【判定根拠、課題と対応】 近年導入を進めている化学分析機器の有効活用を目指し、収蔵品だけでなく寄託品の修理も含めて、担当研究員と修理施工者との連携を深め、分析件数を漸増させている。今後もより積極的な活用を目指し、機器の積極的な活用を図るため館内指針の策定などを進める必要性がある。

【書式Ａ】　施設名 奈良国立博物館　処理番号 1313-2

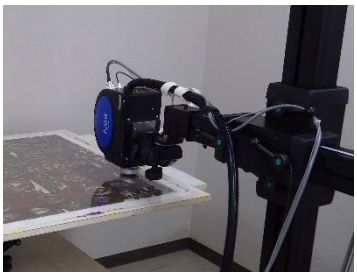
中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－1　収蔵品の修理　　②　科学的な技術を取り入れた修理

【年度計画】
伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術を取り入れた修理を実施する。
(4館共通)
1)紙本文化財について、繊維同定を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
2)修理前あるいは修理中に、蛍光Ｘ線分析、赤外線撮影、Ｘ線透過撮影、三次元蛍光分光分析などの光学的調査を行い、文化財の材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。
(奈良国立博物館)
1)木造文化財について、木材樹種同定の調査を行い、文化財の材料の解明及び修理指針の検討に役立てる。
2)古墳出土の甲冑片、武具等鉄製品、木造彫刻などのＸ線撮影及び実測図作成を順次進め、材料・技術の解明及び修理指針の検討に役立てる。

担当部課	学芸部保存修理指導室	事業責任者	室長　鳥越俊行

【実績・成果】
(4館共通)
1) 株式会社文化財保存と共同で修理文化財についての調査を実施し、修理指針の検討資料とした。
2)・館蔵品や寄託品の修理に際し、当館が保有する光学機器を用いて当館研究員と文化財保存修理所工房職員が共同で赤外線撮影や顔料の蛍光Ｘ線分析等を実施した。
・絵画作品の修理に際して赤外線撮影を実施した。(実施計6回)
・修理に反映させるため、絵画表面の顔料に対して蛍光Ｘ線分析を実施した。 (実施計2回)
・工芸や彫刻作品の修理に際して、内部構造を調査するためＸ線透過撮影を実施した。(実施計3回)(奈良国立博物館)
1)当館文化財保存修理所で修理施工された木造彫刻作品について、京都大学生存圏研究所と連携して樹種同定調査を行い修理に活用した。(実施計6件)
2)古墳出土の鉄器を中心とする館蔵考古資料の修理に際し、Ｘ線撮影及び蛍光Ｘ線による材質調査を行い、製作技術の解明や修理方針の策定に活用した。(実施計1回)

【補足事項】
・文化財保存修理所の各工房が、当館の館蔵品や寄託品の修理に際して文化財調査を当館研究員と共同で実施し、データの収集・共有化に努めた。またこれらの調査を円滑に進めるために、当館の備品である光学機器(高精細デジタルカメラ、近赤外線カメラ、蛍光Ｘ線分析装置、Ｘ線透過撮影装置など)を積極的に活用した。



蛍光Ｘ線分析器

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
光学的調査	18回	－	－		－	－	9	7

【年度計画に対する総合評価】 評定： A	【判定根拠、課題と対応】 修理所との連携が進み、修理に際して共同で調査を行う環境が整ってきた。これにより26年度を大きく上回る回数の光学的調査を実施することができた。今後も積極的に調査することで、よりよい修理のために得られたデータの活用を図る。

【中期計画記載事項】修理を要する収蔵品等は、機構の保存科学及び修復技術担当者の連携の下、伝統的な修理技術とともに科学的な保存技術の成果を適切に取り入れながら、緊急性の高い収蔵品等から順次、計画的に修理する。

【中期計画に対する評価】 評定： B	【判定根拠、課題と対応】 保存科学担当者と修理技術者が繊維同定や樹種同定、科学分析などを修理前や修理中の文化財に対し行うことで、科学的な保存技術の成果を取り入れ、中期計画を順調に遂行した。

【書式Ａ】　施設名 京都・奈良・九州国立博物館　処理番号 1320

項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－2　国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実

【年度計画】（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
1)文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行う。
（京都国立博物館）
1)引き続き文化財保存修理所の改修工事を行う。

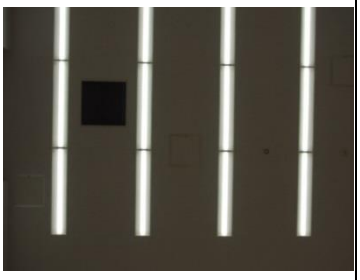
担当部課	京都国立博物館総務課 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館学芸部博物館科学課	事業責任者	課長　植田義雄 課長　中村　恵 課長　今津節生

【実績・成果】
（京都国立博物館・奈良国立博物館・九州国立博物館）
1)・奈良国立博物館の文化財保存修理所等の整備・充実に向けた検討を行った。
・九州国立博物館の保存修復施設について、室内温湿度環境の改善の検討を行った。
・九州国立博物館の保存修復施設について、ＬＥＤ照明に交換した。
・九州国立博物館の保存修復施設第1室の中二階化を図った。
（京都国立博物館）
1)・文化財保存修理所改修工事（2期）、関連する電気設備工事及び機械設備工事が完了した。

【補足事項】
（奈良国立博物館）
・保存修理所内の空調機の点検を行い、加湿装置の部品を一部交換した。
・修理工房内で使用するリフターの点検を行った。

（九州国立博物館）
・保存修復施設内の温室度環境をより安定的に維持し、安全に修復作業を行うことを目的として、博物館の東壁に面する保存修復施設外周部のペアガラスの上に新たにガラスを貼り付け、遮熱性と断熱性を高めた。その結果、厳冬期でもガラス面の結露が無くなった。
・九州国立博物館の保存修復施設第1～4室は天井高が7ｍあり、蛍光灯が切れた場合の交換作業に大変な労力を必要としていた。27年度、蛍光灯が切れ出したため、ＬＥＤ照明に全て交換し、交換の労力を少なくすると共に、省エネ化を図った。

ガラス工事後の様子（九博）


LED 照明交換後の様子（九博）

・装潢作業を行っている第1～3室では、古文書や歴史資料等の修理事業が増加し、施設が手狭になってきているため、第1室の中二階化を図った。

工房用流し（京博）

バックアップ熱源（京博）

電気室更新（京博）

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】順調に成果をあげている。京都国立博物館では文化財保存修理所の改修工事が完了した。九州国立博物館では、施設の改修等によって、より安全な施設や環境で修理を実施できるようになった。

【中期計画記載事項】国立博物館の文化財保存修理所の整備・充実に努める。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】中期計画に対し順調に成果をあげることができた。京都国立博物館では文化財保存修理所の改修工事が完了した。九州国立博物館では、安全な施設、環境で修理を実施できるよう、日常的に検討を行うことができた。

【書式Ａ】　施設名 東京・京都・奈良・九州国立博物館　処理番号 1330

中項目	1　歴史・伝統文化の保存と継承の中核的拠点としての収蔵品の整備と、次代への継承
事業名	(3)－3　収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本整備の充実に向けた検討

【年度計画】収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査研究並びに修理に伴う調査研究のための基本設備の充実に向けた検討を行う。

担当部課	東京国立博物館学芸研究部列品管理課 京都国立博物館学芸部列品管理室 奈良国立博物館総務課 九州国立博物館学芸部文化財課	事業責任者	課長　救仁郷　秀明 室長　宮川　禎一 課長　中村　恵 課長　冨坂　賢

【実績・成果】

（東京国立博物館）

・自己収入による予算の追加配分により東洋館2階の収蔵庫に棚(東洋民族)を新設し、収納の効率化を行った。

・本館地下の収蔵庫(考古分野2箇所)について清掃と整理を実施した。

（京都国立博物館）

・26年度に完了した平成知新館への作品移動について、完了後に収蔵品の配置を再検討し、収蔵空間の効率化を図った。

・26年度に改修が終了した北収蔵庫について、収蔵品の移動を行った。特に今後継続的に見込まれる大型の寄贈案件を収蔵する空間として運用を開始した。

・明治古都館の本格改修事業に伴う東収蔵庫の減築計画の実施に向けて、減築後の運用に関する検討を始めた。

・外箱のない作品について、資料保存用のアーカイバル・ボックスを導入した。これによりボックスに収納した作品を積み重ねることができ、収蔵空間の増加を実現した。

・KICK（けいはんなオープンイノベーションセンター）内の2室の収蔵庫は、26年度の収納棚整備に続き、京都府と連携して機械設備の点検・整備を進め空調運転を開始、各種のモニタリングにより保存環境としての安全性を確認した後、その一部を館蔵品の外部収蔵場所として運用を開始した。

（奈良国立博物館）

・複数室一体で温湿度管理を実施していた箇所について、詳細な温湿度管理に向けて各部屋毎に計測器を設置した。

・収蔵スペースの確保のため、低利用度スペースの収蔵庫化について検討を行った。

（九州国立博物館）

・26年度に引き続き写場の整備に取り組み、出入口用の鉄扉が大扉１枚造りであり撮影に影響を与えることがあったため、小扉を付設した。

・長期借用及び一時預かり文化財について、当館展示等活用の頻度を勘案し、返却するものは返却し、収蔵スペースの確保に結びつけた。

・館内における遊休スペース活用のために、倉庫に中軽量棚を設置し、備品等保管のスペースを確保した。

【補足事項】

（京都国立博物館）

・平成知新館収蔵庫での作業の効率化のために、脚立を複数本導入した。

・東収蔵庫の減築に際しては、現存の収蔵棚を最大限活用する方針で、再使用できるものを精査した。

・KICK収蔵庫内にて実施したモニタリングは、データロガーによる温湿度調査、昆虫生息調査、付着菌・浮遊菌調査、気流調査である。この結果は、季節に応じた空調の設定変更、害虫侵入対策等に速やかに生かされた。

KICK 収納棚の付着菌調査風景（京博）

倉庫に設置した中軽量棚（九博）

【定量的評価】項目	27年度実績	目標値	評定	経年変化	23	24	25	26
－	－	－	－		－	－	－	－

【年度計画に対する総合評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】順調に成果をあげている。京都国立博物館は収蔵庫内の効率的な収納について運用の改善に努め、九州国立博物館は、26年度に引き続き写場整備に取り組み、施設の改善を図った他、遊休スペースの有効活用に取り組んだ。

【中期計画記載事項】収蔵品、寄託品の増加に伴う収蔵スペースの確保及び収蔵品の調査・研究並びに修理に伴う調査・研究のための基本設備の充実を図る。

【中期計画に対する評価】 評定：　B	【判定根拠、課題と対応】順調に成果をあげた。京都国立博物館は収蔵庫改修計画において28年度以降も弾力的な運用ができるよう検討を行い、基本設備の充実を図っている。九州国立博物館は施設の増床が望めない中、収蔵品の保管場所を工夫するなどにより、収蔵スペースの確保等を行い、写場の整備を進めた。